

『風に紅葉』冒頭文の独自性

河野千穂

擬古物語の最末期作品である『風に紅葉』の冒頭文は、市古貞次氏⁽¹⁾、小木喬氏⁽²⁾らが指摘しておられるように、珍しい性格のものと言える。冒頭文に語り手の存在が現れているのは非常に興味深く、主題提示と思われるような文章もある。『源氏物語』以後の王朝物語の冒頭文の方法は諸氏によって分類がなされているが、この『風に紅葉』の冒頭文をそれにあてはめるのは困難である。市古氏、小木氏、辛島正雄氏⁽³⁾は、それぞれ『秋の夜の長物語』、『夜の寝覚』、『讃岐典侍日記』、『中務内侍日記』などとの近似を指摘しておられるが、単に一部分の近似に過ぎないという感が否めない。『風に紅葉』の冒頭文においては、従来のような近似のみを求める冒頭文研究では十分な考察は不可能であり、又、擬古物語の最末期作品であることを考慮して、多様な角度からの研究が相応しいと考えるのである。そこで本稿においては、『風に紅葉』冒頭文の綿密な構造分析をすると共に、その独自性について述べていきたい。

まず、『風に紅葉』の冒頭文を挙げる。なお、引用文は宮内庁書陵部本の本文に適宜漢字を宛てたものである。

「風に紅葉の散る時は、さらでももの悲しきならひと言ひおけるを、まいて老いの涙の袖の時雨は晴れ間なく、苔の下の出で立ちよりほかは、何の営みあるまじき身に、せめての輪廻の業にや、昔、見聞きしこと、人の語りしこと、そぞろに思ひ続けられて、問はず語りせまほしき心のみぞ出で来る。その中に、なべて物語などに言ひ続けたる人には代りて、艶にいみじうもあらず、波の騒ぎに風静かならぬ世の理を思ひ知るかとすれど、それもち返りがちに、よろづにつけて心得ぬ人の上をぞ、案じ出だしたる。あまり聞きどころなきは、昔にはあらぬなむめり」

このように、『新古今和歌集』冬部にある、

「神無月風に紅葉の散る時はそこはかとなくものぞかな

しき」

の引歌から始まり、語り手が老いた身の上で問わず語りませせてほしいと述べているのである。引歌や漢詩の引用で起筆するのは、周知の通り『狭衣物語』からの流れであるが、『狭衣物語』型の冒頭文が、引歌などから情景描写、人物紹介へと展開していくのに対し、『風に紅葉』の冒頭文においては、引歌から語り手の執筆動機、物語内容の説明へと展開していくのである。この為、辛島氏も指摘されているように、引歌から始まっているとは言え、単純に『狭衣物語』型と言いつれない。この『風に紅葉』の冒頭文と酷似しているものに同じく擬古物語の『風につれなき物語』がある。

「この葉しげきくれたけのよよにふるごととなりぬれば、なにのをかしきふしとてすぐれたるきき所なけれど、おのづから心にとまりたるすぢすぢを思いでつつ、秋のあけがたきおいのねざめのつれづれなるままに、こころをやりたりしとはすがたりをかきあつめて、とまらむあとのあやしけれど、世をまつりごちたまひし大臣の御こゝを」と女あまたおはしき」

『古今和歌集』雑下

「世にふれば言の葉しげき呉竹のうきふしごとに鶯ぞなく」の引歌から、やはり語り手の執筆動機へと展開していくところは『風に紅葉』と全く同じである。

ここで、引歌から離れて執筆動機に注目してみたい。執

筆動機が本文で語られている物語には、他に『堤中納言物語』中の『はなだの女御』や『あきぎり』があるが、それらは本文で語られているのであり、冒頭文に執筆動機が語られている王朝物語は、『風に紅葉』と『風につれなき物語』の二作品のみである。そもそも執筆動機の説明は、日記・随筆・紀行文などの序文に見受けられるものである。そこで、管見の及ぶ限りの日記・随筆・紀行文について次のように分類した。

《序のないもの》

『枕草子』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『弁内侍日記』『うたたね』『十六夜日記』『とはずがたり』『竹むきが記』

《序のあるもの》

土佐日記	一〇c			引歌など	執筆動機	執筆の対象の説明
蜻蛉日記					○	○
讃岐典侍日記	二c				○	○
方丈記	一三c					○
たまきはる			△		○	○
海道記			△		○	○
建礼門院右京大夫集					○	○
東関紀行					○	○
中務内侍日記			△		○	○
徒然草	一四c				○	○

注(引歌の△は起筆部分以外に用いられている場合。cは世紀の略で、ほぼ年代順に並べた。又、『建礼門院右京大夫集』は歌集ではあるが、序を持つため加えた)

序のないものは冒頭で執筆動機には触れていないが、表のように、序を持つものはほぼ、そこで執筆動機を述べており、又、執筆動機が語られているものには全て執筆の対象の説明もなされている。調査した日記・随筆・紀行文のうち、約三分の一が序において執筆動機を描いており、その全てが執筆の対象も説明しているのであるが、では、これらの執筆動機を持つ序文の述べられ方と『風に紅葉』『風につれなき物語』の冒頭文の述べられ方との比較を試みたい。比較がしやすいよう、まず冒頭文の解体を試みる。解体の方法であるが、①執筆動機②執筆の対象③執筆方法④語り手自身の批評・感想、以上の四つの部分に分けた。そして解体したものを、次に挙げた。

『土佐日記』

①「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。②その年の、十二月の、二十日あまり一日の日の、戌の時に門出す。そのよし、いささかに、ものに書きつく」

『蜻蛉日記』

「かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、と

にもかくにもつかで、世に経る人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂もあるにはあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ、^①ただ臥し起き明かし暮らすまに、世の中におほかる古物語のはしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなむ、天下の人の品高きやと問はむためしにもせよかし、とおぼゆるも、^②過ぎにし年月ごろのこともおぼつかかりければ、^③さてもありぬべきことなむおほかりける」

『讃岐典侍日記』

「五月の空もくもらはしく、田子のもすそも、ほしわぶらむもことわりと見え、(中略)もろとも八年の春秋つかうまつりしほど、常はめでたき御事おほく、あしたの御行、夕の御笛の音、わすれがたきに、^④なぐさむやと、しいづる事ども書きつづければ、筆のたちども見えずきりふたがりて、硯の水に涙落ちそひて、水くきの跡もながれあふこちして、涙ぞいとどまさるやうに、^⑤書きなごせんにまぎれなどやするとて書きたる事なれど、姨すて山になぐさめかねられて堪へがたくぞ」

『たまきはる』

「たまきはる命をあだに聞、しかど君恋ひわぶる年は経にけり

あるかなきかの身の果てに、時の間も思しづめむ方なきかなしさの、身に余りぬる果て果ては、(中略)昔今けぢめしるかに変り果てにけるかなと思ふに、^①いまさらよしなき古事さへ思出でられて、^②統きもなく、いふかひなき昔物語をつれづれなるまゝに言ひ出づれば、片端をだにその世を見ぬ人は、さすがに聞かまほしうするもありけり。古めかしかりし人々は、『今様の珍らしく見慣はぬ』とのみ言ひしかど、今はそれも限りなく古代なる昔語になりけり」

『海道記』

「白川ノ渡、中山ノ麓ニ、閑素幽栖ノ侘土アリ。性器ニ底ナケレバ、能ヲ拾ヒ芸ヲ容ル、ニ足ベカラズ。(中略)湯井ノ浜ニ至テ一時半偃息シ、シバラク心ヲユルプ。時、^①二萍実西ニ没ム、旧里ヲ忍テ後会ヲ期シ、桂華東ニ開ク、外郷ニ向テ中懐ヲ悩ス。仍三十一字ヲ綴テ、千思万憶旅ノ志ヲ演ツ。此ハユレ、文ヲ用テサキトセズ、^②調ヲ以テ本トセズ、只境ニ牽レテ物ノ哀ヲ記スルノミ也。外見ノ処ニ其嘲ヲユルセ」

『建礼門院右京大夫集』

「^①家の集などいひて、歌よむ人こそ書きとどむることなれ、これは、ゆめゆめさにはあらず。^②ただ、あはれにも、かなしくも、なにとなく忘れがたくおぼゆることどもの

あるをりをり、ふと心におぼえしを思ひ出でらるるままに、^①我が目ひとつに見むとて書きおくなり」

『東関紀行』

「^①齡は百とせの半に近づきて、鬢の霜やうやくに冷しといへども、なす事なくして徒に明し暮すのみにあらず、^②さしていつこに住はつべしとも思ひ定めぬ有様なれば、(中略)つるに十余日数をへて、鎌倉に下り着し間、或は山館野亭の夜の泊、或は海辺水流の数かさなるみぎりいたるごとに、目に立所所、心とまるふしぶしを書置て、^③忘れず忍ぶ人もあらば、をのづから後の形見にもなれとて也」

『徒然草』

「^①つれづれなるままに、日ぐらし硯に向かひて、^②心につりゆくよしなしごとをそこはかたなく書き付くれば、あやしうこそ物狂おしけれ」

このように見てみると、『讃岐典侍日記』以外のものは、ほぼ同じ性格と言えるのである。『讃岐典侍日記』が、読み手に執筆意図を説明するのではなく、自身の心情描写の一端として動機を述べているのに対し、他の七作品は明らかに読み手を意識して、説明的に執筆動機などを述べているのである。それ故、『讃岐典侍日記』以外の七作品について、序の述べられ方を整理してみる。『土佐日記』

『東関紀行』が執筆動機と執筆の対象を述べており、『たまきはる』がそれに加えて語り手自身の批評・感想を述べ、そして『蜻蛉日記』『海道記』『建礼門院右京大夫集』『徒然草』が執筆動機、執筆の対象、執筆方法、語り手自身の批評・感想の全てを述べているのである。このことを考えると、細かい相違点こそあれ、基本的にこれらは全て同じ序の型と言えるのではなからうか。これらの作品同士の影響関係は分からないが、時代から考えると、おそらく『土佐日記』の序の方法が後代に影響を与え、序において執筆動機を述べる場合のパターンを形成していったと思われる。そしてそれぞれの筆者は、そのパターンに自己紹介や自己の人生観などを加える事で独自性を出していたのではないだろうか。

では、この解体の方法を『風につれなき物語』と『風に紅葉』に当てはめてみよう。

『風につれなき物語』

①「この葉しげきくられたけのよよにふることとなりぬれば、なにのをかしきふしとてすぐれたるきき所なけれど、おのづから心にとまりたるすぢすぢを思いでつつ、秋のあけがたきおいのねざめのつれづれなるままに、②こころをやりたりしとはすがたりをかきあつめて、とまらむあとのあやしけれど」

『風に紅葉』

①「風に紅葉の散る時は、さらでももの悲しきならひと言ひおけるを、まいて老いの涙の袖の時雨は晴れ間なく、苔の下の出で立ちよりほかは、何の営みあるまじき身に、せめての輪廻の業にや、昔、見聞きしこと、人の語りしこと、そぞろに思ひ続けられて、問はず語りせまほしき心のみぞ出で来る。その中に、なべて物語などに言ひ続けたる人には代りて、艶にいみじうもあらず、波の騒ぎに風静かならぬ世の理を思ひ知るかとすれど、それもたち返りがちに、よろづにつけて心得ぬ人の上をぞ、案じ出だしたる。あまり聞きどころなきは、昔にはあらぬなむめりなり」

右引用の傍線部の表記によって理解できるように、両方も執筆方法については触れていないが、執筆動機、執筆の対象、語り手自身の批評・感想が述べられており、『風に紅葉』と『風につれなき物語』の冒頭文の近似を改めて確認するのみでなく、前述した序のパターンに大変似ていることも認めることができよう。辛島氏は、『風に紅葉』と似ている日記として『讃岐典侍日記』と『中務内侍日記』を挙げておられるが、それは一部分の言葉や言い回しが似ているだけで、根本的な構成としては、ここに挙げた『土佐日記』『蜻蛉日記』『たまきはる』『海道記』『建礼門

院右京大夫集』『東関紀行』『徒然草』の方が、類似していると言える。更に細かく言えば、語り手の批評・感想が述べられている点から、『蜻蛉日記』『たまきはる』『海道記』『建礼門院右京大夫集』『徒然草』と、構成においては最も類似していると言えるのである。

『風に紅葉』と『風につれなき物語』の冒頭文が、ジャンルの異なる作品のものと類似していることは、擬古物語において革命的なことと言えよう。擬古物語の冒頭文は、いくつかの系統の型がほぼ確立していたが、『風につれなき物語』と『風に紅葉』の作者はそれを踏襲することはせず、物語に日記文学の手法を取り入れることで、他との類似性を免れ得ない運命の擬古物語から一歩抜きん出て、新味を出すことに成功しているのである。これは、前述した『はなだの女御』と『あきぎり』でも、末文であるとは言え執筆動機に触れていることから、同じことが言えるのである。

『はなだの女御』

「内裏にも参らでつれづれなるに、かの聞きし事をぞ。

①『その女御の宮とて、のどかには』『かの君こそ、かたちをかしかんなれ』など、心に思事、歌など書つ、②手ならひにしたりけるを、また人のとりて書うつしたれば、あやしくも有哉。これらつくりたるさまざまおぼえず、よ

しなきものののさまを、そら事にもあらず。世の中に、そら物がたり多かれば、誠ともや思はざるらむ。これ思こそねたけれ。多くは、かたちしつらひなども、この人のいひ、心かけたるなめり。たれならむ。此人を知らばや。(略)

『あきぎり』

「(まことや、かの中宮の)かゝるありがたきすくせのめでたきを、のちのよの人に見せたてまつらんためにかきとゞめぬ」

この二作品も前に挙げた日記・随筆・紀行文の冒頭文の手法と類似しており、物語の中に他のジャンルの手法を取り入れているのである。そしてこのように語り手・書写者の存在を表すことによって、大槻修先生が『はなだの女御』について述べておられるように、

「いかにも実話めかしたテクニクを用いている」のである。

これらのように、日記・随筆・紀行文の冒頭文の方法が、擬古物語の末文や、いくつかの型が定着していた冒頭文に用いられているのである。ここには、筆者の独自性を出そうとする工夫と努力が垣間見られる。塚原鉄雄氏は、その独自の冒頭表現の分類方法で、『夜の寝覚』『堤中納言物語』について、序文の機能から、

「日記文学の方法を、物語文学の構成に導入した方法であつた」

と述べられたが、この『風につれなき物語』『風に紅葉』の冒頭文の型こそ、日記文学の方法を取り入れた、物語文学において画期的な冒頭文の方法と言ふことができよう。日記・随筆・紀行文の方法が物語に享受されている以上、作品同士の影響関係について、より深い考察が必要であるが、現在のところ、冒頭文以外で影響関係を述べられるほどの決定的な類似が指摘できないので、今後更に研究を続けていきたい。

二

次に『風につれなき物語』と『風に紅葉』が引歌から起筆していたことを思い出したい。前述の、執筆動機に触れている日記・随筆・紀行文の中で、引用で起筆しているのは『東関紀行』のみである。構成の類似から、引用においても影響が考えられるか疑いたくなるが、『東関紀行』は『白氏文集』の引用で起筆し、『和漢朗詠集』や『本朝文粹』などの句を多々引用しており、『風に紅葉』と『風につれなき物語』の冒頭文の引歌とは性格を異にしている。ではなぜ、『風につれなき物語』と『風に紅葉』の作者は、冒頭文にわざわざ引歌を用いたのか。冒頭文の引歌の部分

を挙げて考えてみる。

『風につれなき物語』

「ことの葉しげきくれたけのよよにふるごととなりぬれば」

『風に紅葉』

「風に紅葉の散る時は、さらでももの悲しきならひと言

ひおけるを」

とあり、『風につれなき物語』は古今和歌集・雑下

「世にふれば言の葉しげき呉竹のうきふしごとと驚ぞなく」

『風に紅葉』は、新古今和歌集・冬

「神無月風に紅葉の散る時はそこはかどなくものぞかなしき」

をそれぞれ引いているのであるが、どちらも叙景的な言葉で詠まれた和歌であり、又、引用しているのは、その叙景的な言葉の部分なのである。内容的には「ことの葉しげきくれたけ」は、葉や呉竹そのものを詠んでいる歌ではないが、「風に紅葉の散る時」と同じように叙景的情趣が感じられるのである。大槻修先生は『狭衣物語』の冒頭文について、

「起筆部分を漢詩、古歌、先行物語や日記の一部などで、『寄せ木細工』のように構築した美文調でまとめ、加えて冒頭文を情景描写文で飾るといふ新機軸を生み出した」と述べておられる。これは、ほぼ『風につれなき物語』と

『風に紅葉』にも当てはまるのではないだろうか。『風につれなき物語』と『風に紅葉』の冒頭文は情景描写文ではないが、叙景的な言葉で詠まれた和歌を引くことにより、「『寄せ木細工』のように構築した美文調」となっており、その引歌の効果によって、情景的要素も加わっているのである。つまり、叙情描写文を、引歌を用いることによって叙景的に表していると言えるのではないかと考えるのである。先学によると『風に紅葉』は、

「神無月ふりそふ袖の時雨かなさらでももろき老いの涙に」
(統拾遺・雑秋)

「知りにつれなき物語」
(古今・雑下)

の二首をさらに続けて引いており、「時雨」「波の騒ぎに風静かならぬ」と『風につれなき物語』よりも一層、叙景的色彩を帯びているのである。

以上をまとめると、『風につれなき物語』と『風に紅葉』は日記・随筆・紀行文の序の型と類似した冒頭文を持ちながらも、尚且つ『狭衣物語』のような「構築した美文調」で叙景的な装飾を加えていると言える。言い換えれば、引歌を用いることによって日記型の冒頭文に物語風の装飾を加えるといった工夫を凝らしているのである。勿論、引歌は装飾以外の役割も果たしているのであるが、叙景的な和

歌を引くことによって、叙情と叙景の融合が図られているということは、両作品の作者の並々ならぬ創作意欲と独創性を感じさせると言えよう。

三

では今度は『風につれなき物語』ではなくて『風に紅葉』のみに見える冒頭文の工夫について触れたい。直接的な影響関係は認められないが、成立年代から考えると、『風に紅葉』が『風につれなき物語』の冒頭文の方法を継承したということになる。『風につれなき物語』が、言わば実験的に新しい方法を試みた第一段階の未完成の形としたら、『風に紅葉』はそれに改良を加え発展させた、より完成した形と言うことができよう。つまり、『風に紅葉』の冒頭文には、『風につれなき物語』より一層の作者の工夫が感じられるのである。その理由を挙げると、まず、前でも述べたように『風につれなき物語』より叙景的色彩が増していること、そして主題に触れていること、最後に冒頭文全体が物語の内容と相俟っているということである。

では二番目の理由である、主題性について説明を加えたい。『風につれなき物語』が執筆の対象について、冒頭文で「心にとまりたるすぢすぢを」「こころをやりたりしとはすがたりを」というように、『土佐日記』『蜻蛉日記』

『たまきはる』『海道記』『建礼門院右京大夫集』『東関紀行』『徒然草』とほぼ同じく、簡潔に、そして大まかにしか述べていないのに対して、『風に紅葉』では、

「その中に、なべて物語などに言ひ続けたる人には代りて、艶にいみじうもあらず、波の騒ぎに風静かならぬ世の理を思ひ知るかとすれど、それもたち返りがちに、よろづにつけて心得ぬ人の上を」

というように、普通の物語の主人公とは異なり優雅でも立派でもなく、万事につけて真意を悟ることのできない人の身の上を語るのだと、具体的に内容の説明をしているのである。これは、神田龍身氏が指摘されているように主題提示となっており、その点では『風につれなき物語』と異なり、『夜の寢覚』の冒頭文と似ているのではないだろうか。

『夜の寢覚』

「人の世のさまざまなるを見聞きつもるに、なほ寢覚の御仲らひばかり、浅からぬ契りながら、よに心づくしなる例は、ありがたくもありけるかな」

又、大槻先生が『夜の寢覚』型としておられる物語を挙げると、

『思はぬ方にとまりする少将』

「昔物語などにぞ、かよの事は聞ゆるを、いとありがたきまで、あはれに浅からぬ御契りのほど見へし御こと

を、つくづくと思ひつづくれば、年のつもりけるほども、あはれに思ひ知られけむ」

『苔の衣』

「あふての恋もあはぬなげきも、人の世にはさまざまおほかなる中に、苔の衣の御なからひばかり、あかぬわかれまで、ためしなくあはれなることはなかりけり」

傍線部が主題提示の部分であるが、それぞれ昔物語や現実の男女の仲と見比べた上で主題提示を述べている。『風に紅葉』は、これらのような男女の契りが主題ではないが、他の物語と比べた上で主題提示をしているのは、『夜の寢覚』型と似ていると言えよう。このような主題提示の部分の構成の類似がある為、『風に紅葉』のこの部分は『夜の寢覚』型の冒頭文の影響があるのではないかと考えられる。次に冒頭文全体が物語の内容と相俟っているという点であるが、主題提示の部分にあるように、男主人公は世の中の無常を悟りきれず、万事につけて真意を悟ることのできない人であり、それを中心として物語は進んでいく。市古氏が指摘しておられるように、「仏教思想の浸潤があらわ」なのであるが、冒頭部分もそう言えるのではなからうか。

「神無月風に紅葉の散る時はそこはかたなくものぞかなしき」

「神無月ふりそふ袖の時雨かなささらでももろき老いの涙

に」

「知りにつむ聞きても厭へ世の中は波の騒ぎに風ぞしくめる」

引かれている前の二首は悲哀感を詠み込んでおり、最後の和歌は世の中の無常を詠んでいる。そして、

「苔の下の出で立ちよりほかは、何の営みあるまじき身」

「輪廻の業」

などともあり、全体的に仏教思想が漂っている。そして、

「老いの涙の袖の時雨は晴れ間なく、苔の下の出で立ち

よりほかは、何の営みあるまじき身」

という語り手自身の状態の描写は、全てに悟りをひらけず出家するに至らない主人公の運命を示唆しているようである。このように冒頭部分には、仏教的無常観と関連するような表現や主人公の運命を暗示するような表現が見られ、全てが一貫したイメージを醸し出しており、物語の内容と対応していると言えるのである。

このように、『風に紅葉』には『風につれなき物語』以上に冒頭文に対する工夫が見られるのである。多様な作品からの摂取だけにとどまらず、独自のアイデアも駆使しようとする作者の自由な発想と冒険心が窺えよう。

四

以上、『風に紅葉』の冒頭文について考察を加えてきた。まとめると、執筆動機の説明と構成は『蜻蛉日記』『たまきはる』『海道記』『建礼門院右京大夫集』『徒然草』などの、日記・随筆・紀行文の序の方法と類似しているが、『狭衣物語』のように引歌を用いることで叙情描写に叙景性を加えたり、『夜の寝覚』のような主題提示もしており、又、このように構成されている冒頭文自身が物語の内容と相俟っているということになる。構成がほぼ同じということと『風につれなき物語』の影響が考えられるが、主題提示と冒頭文と物語内容の対応には『風に紅葉』の作者の獨創性を感じられるのである。結論として『風に紅葉』の冒頭文は、擬古物語の最末期作品に相応しく、色々な冒頭文の方法を孕みながら、自己の工夫も加え、新しい独自の冒頭文の型を作り上げていると言えよう。

今まで擬古物語は、模倣の文学として位置付けられ、その独自性に目を向けられることは余りなかった。しかし、最近、擬古物語独自の価値を認められる諸氏のご論文が次々と発表され、擬古物語研究の新たな可能性が浮き彫りにされつつあると感じる。本稿で述べてきた冒頭文も、擬古物語独自の価値を認めるに相応しいものである。擬古物語冒

頭文の独自の工夫については、大槻先生が既に述べられている。⁽¹⁸⁾ 大槻先生が挙げておられる冒頭文の中でも特に注目すべきものは『夢の通ひ路』と改作本『夜の寢覚』である。『夢の通ひ路』の冒頭文には、夢の中で巻物を渡されるといふ記述があり、物語はその巻物を読んでいくかたちですすむのである。そして、冒頭文に対応する末文で終えている。改作本『夜の寢覚』も、冒頭文と末文が対応する方法を用いているのである。又、前で挙げた『はなだの女御』も冒頭文と末文が対応しているのである。

擬った冒頭文と末文の対応を持つ『はなだの女御』、そして同じく冒頭文と末文が対応し、それに加えて他の工夫もしている『夢の通ひ路』と改作本『夜の寢覚』、本稿で考察してきた『風に紅葉』と『風につれなき物語』、これらの擬古物語は先行物語の方法をそのまま踏襲することはせず、冒頭文で独自性を出すことに成功しているのである。これらの冒頭文の工夫と独自性は、擬古物語の評価を一步進めるに相応しいものであろう。

《注》

- 一、市古貞次氏『中世小説とその周辺』（東京大学出版会 一九八一・十一月）
- 二、小木喬氏『鎌倉時代物語の研究』（東寶書房 昭和三十

十六・十一月）

三、辛島正雄氏「『風に紅葉』物語覚書（二）」『文献探
究・9』（昭和五十六・十二月）

四、三と同じ。

五、『風につれなき物語』との類似は既に辛島氏も三にお
いて指摘されている。

六、この解体の方法は、古田擴氏の『徒然草』の解体の方
法を参考とさせていただいた。古田氏は『徒然草』の
序を①随筆の動機②その対象③その表現方法④
その結果の心境、以上の四点に分けられている。この
分類方法を基底として、言葉を変えて分類した。古田
擴氏「解釈の生長」『文学』（昭和十・十二月）

七、大槻修先生校注『堤中納言物語』とりかへばや物語』
（初版新日本古典文学大系二十六卷 岩波書店 一九
九二・三月）

八、塚原鉄雄氏「物語文学の冒頭・結末表現」三谷栄一氏
編『体系物語文学史 第二巻』（有精堂 昭和六十二・
二月）

九、『風に紅葉』の時代に最も近い写本を調べたところ、
▼『土佐日記』文暦二定家写・為家写▼『蜻蛉日記』
明応二年写▼『たまきはる』同時代のものはなし▼
『海道記』貞永二年写▼『建礼門院右京大夫集』九大

細川本（鎌倉末期）・正元元奥書本（南北朝時代写）

▼『東関紀行』同時代のものはなし▼『徒然草』成立が同時代、とあった。しかし、散逸した写本も考えられるのではっきりしたことは言えない。そして、一応、冒頭文以外で気がついた類似点を挙げてみる。

◇『海道記』 「椶ノ村立ハ三輪ノ山ニアラズトモ、恋敷ハ

問テモマイラン。(略)

思フ事ノマヽニ叶ヘヨ杉タテル神ノ誓ノシル

シヲモミン」

『風に紅葉』

「杉の群立ちなど見たされて、(略)

三輪の山身はいたづらに朽ちぬともしるしのすぎたれかたづねん」

◇『建礼門院右京大夫集』

『建礼門院右京大夫集』

1 まよふべき闇もやかねてはれぬらむ書きおく文字の法のひかりに

2 なさけおく言の葉ごとに身にしみて涙の露ぞいとどこぼるる

『風に紅葉』

1 夜もすがら行ふ法の光には闇をもいかが晴るけざるべき

2 草枯れの風の末の言の葉をわが身にしむるほどぞはかなき

◇『蜻蛉日記』

『蜻蛉日記』

1 おぼつかかわれにもあらぬくさまくらまだこそ知ら

ねかかる旅寝は 兼忠女 (全集) 三一二 p

2 わりなくもすぎたちける心かな三輪の山もとたづねはじめ

道綱 三三〇 p

3 かひなくて年経にけりとながむれば袂も花の色にこそしめ

道綱 三四一 p

4 うちとけて今日だに聞かむほととぎすしのびもあへぬ時は来にけり

道綱 三四五 p

『風に紅葉』

1 われながら思はぬほかに旅寝してよそにもげにぞあやしかるらむ 男君 (この次の場面)

「わが心の果てもおぼつかなかるべきわざかな」

2 三輪の山身はいたづらに朽ちぬとも徴の杉と誰かたづねむ 故式部卿の宮の女君

3 年を経て心の色は染めませど色に出でねばかひなかりけり 梅壺の女御

4 しのぶるか雲のよそなるほととぎす音にあらはれて今は聞かばや 男君

1の歌の場面では、互いに単衣を交換するという設定も同じである。又、『蜻蛉日記』の二・三・四首目全てが道綱と大和立つ女の贈答歌であることと、四首とも近接した場面で詠まれていることから、これまで挙げてきた中では最も『風に紅葉』との影響関係が考えられるとは言えよう。しかし、二・三首目は常套的な詠み方であり、根拠としては希薄である。

一〇、大槻修先生『中世王朝物語の研究』（世界思想社

一九九三・九月）

一一、辛島正雄氏の指摘。「校注『風に紅葉』―巻一―

『文学論輯・三六』（一九九〇・十二月）

一二、樋口芳麻呂氏、辛島氏の指摘。辛島氏は一三と同じ。

樋口氏「かぜに紅葉の典拠について」『愛知大学国文学8』

（昭和四十一・十二月）

一三、類似点は次のものしかなかった。

①「春日」が出てくること。

②『風につれなき物語』

神託の通り、中宮は皇子出産後この世を去る。

『風に紅葉』

聖の「大きな御嘆きなどや侍らむ」という
子言通り、一品の宮は男の御子を出産後この

世を去る。

一四、『風につれなき物語』は『風葉和歌集』に入っている
ので、それ以前の成立。

『風に紅葉』は樋口氏の一二の論文によると、南北
朝頃の成立。故に『風につれなき物語』の方が成立
がはやいことになる。

一五、神田龍身氏「『風に紅葉』考―少年愛の陥穽―」

『源氏物語とその前後』（桜楓社 昭和六十一・五
月）

一六、一〇と同じ。

一七、一と同じ。

一八、一〇と同じ。

《『風に紅葉』以外の引用本文》

『あきぎり』―市古貞次・三角洋一氏編 初版『鎌倉時代
物語集成一巻』（笈間書院 昭和六十三・

九月）

『風につれなき物語』―市古貞次・三角洋一氏編 初版

『鎌倉時代物語集成二巻』（笈間書院 一

九九九・七月）

『苔の衣』―市古貞次・三角洋一氏編 初版『鎌倉時代物
語集成三巻』（笈間書院 一九九〇・五月）

『土佐日記』『蜻蛉日記』―松村誠一氏他校注 二版『日

本古典文学全集九卷』（小学館 昭和四十
九・七月）

『夜の寝覚』—鈴木一雄氏他校注 初版『日本古典文学全
集十九卷』（小学館 昭和四十九・十月）

『讃岐典侍日記』—玉井幸助氏注『讃岐典侍日記全註解』
（有精堂 昭和四十四・五月）

『たまきはる』—小原幹雄氏他注『たまきはる全注釈』
（笠間書院 昭和五十八・二月）

『海道記』『東関紀行』（『中世日記紀行集』）—大曾根
章介・久保田淳氏校注 初版『新日本古典文
学大系五十一卷』（岩波書店 一九九〇・十
月）

『徒然草』—久保田淳氏校注 初版『新日本古典文学大系
三十九卷』（岩波書店 一九八九・一月）

『はなだの女御』『思はぬ方にとまりする少将』（『堤中
納言物語とりかへばや物語』）—大槻修先
生 初版『新日本古典文学大系二十六卷』
（岩波書店 一九九二・三月）

『建礼門院右京大夫集』—糸賀きみ江氏校注 二版『新潮
日本古典集成二十八卷』（新潮社 昭和五
十七・三月）

（甲南女子大学大学院文学研究科）